

令和5年度教育未来委員会行政視察報告書

教育未来委員会委員長 渡 辺 忍

【視察日程】 令和5年10月24日(火)～10月26日(木)

【視察委員】

委員長 渡辺 忍

副委員長 岳田 雄亮

委員 石川 美香、黒澤 和泉、大平 真弘、安喰 初美、
岩井 雅夫、段木 和彦、森山 和博、石井 茂隆

【視察地及び調査事項】

1 川崎市子ども夢パーク・フリースペースえん(10月24日午前)

(1) 子どもの居場所づくりなどについて(現地調査)

2 愛知県名古屋市(10月25日午前・午後)

(1) 名古屋市立山吹小学校

イエナプランを取り入れた教育について(現地調査)

(2) 名古屋市科学館

名古屋市科学館の取組等について(現地調査)

3 岐阜県(10月26日午前)

(1) 岐阜県学校・フリースクール等連携ガイドラインについて(現地調査)

【視察報告】

1 川崎市子ども夢パーク・フリースペースえん

調査目的	<p>子ども夢パークは、「子どもたち一人ひとりが大事にされなければならない」を実現するために、川崎市の子どもと大人と一緒に作った川崎市子どもの権利に関する条例を基に平成15年7月につくられた施設である。</p> <p>また、同施設内にあるフリースペースえんは、学校外で多様に育ち、学ぶ場として作られた日本初の公設民営型のフリースペースであり、子どもの居場所づくりなどに関する先進事例として調査し、本市取組の参考とする。</p>
視察概要	<p>1 調査項目 子どもの居場所づくりなどについて(現地調査)</p> <p>2 説明者 ・認定NPO法人フリースペースたまりば 理事長</p> <p>3 主な質疑応答(□:質疑、■:答弁)</p> <p>□ 学校の先生が研修で来ていたとのことだが、どういった選び方がされたのか。</p> <p>■ 神奈川県教育委員会は、20年近く前に先生の企業研究の枠の中からフリースクールへの派遣を決め、校長先生からの推薦により、派遣された。</p>  <p style="text-align: center;">【視察の様子】</p> <p>□ 不登校問題は学校を変えるべき問題とおっしゃっていたが、校長先生の意識が変化することで学校が変わっていくのか。もしくは個々の先生が変えていく必要があるのか。</p> <p>■ 現場に近づくほど先生方は上に意見を言えず保守的・管理的となる傾向が強く、教育委員会や校長あたりのほうが柔軟に行く場合が多い。校長がリーダーシップをとって腹をくれば、学校を変えることができる。権限は教育委員会ではなく校長が持っている。</p> <p>□ 年間予算はいくらか。</p> <p>■ 夢パーク全体で約7,900万円。そのうちフリースペースに該当しているお金は2,700万円ぐらいだが、16人働いているので、人件費だけでも全然足りていない。フリースペースだけで、NPOとしていろいろな持ち出しで実際に家賃、水道光熱費を入れないで5,000万円はかかる。</p>

市で予算をつけるのであれば、5,000万円ぐらいの覚悟があれば相当いいことができると思うが、最低でも3,000万円必要ではないか。5,000万円というのは、障害を持つ子を4割程度受け入れていることからスタッフを加配しているためであるが、そこまでやれたらすごい。私たちは2,700万円以外のお金を必死で助成金や寄附、実施事業で集めている。

4 現地調査の様子



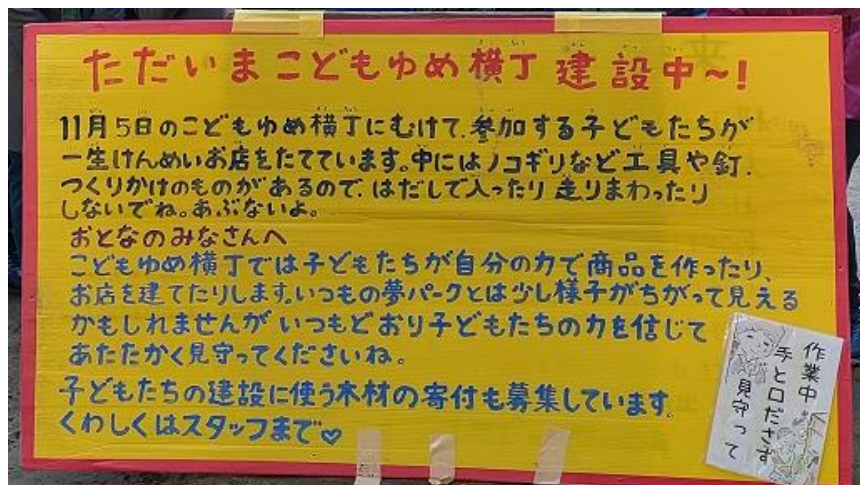
【全天候広場たいよう】



【こども夢パーク内】



【子供たちの手で作る「こどもゆめ横丁(建設中)」】



【「こどもゆめ横丁」の注意書き】

主な
委員所感

- 不登校児童生徒数は、全国で約30万人に上り、小学生で59人に1人、中学生で17人に1人の割合となっている。不登校の原因と思われるいじめのピークは小学校2年生とのことで、いじめの低年齢化が進んでいることに驚いた。
- 正しさと正解を求める家庭・学校環境、親の不安などから子供たちは自信が奪われ、世界的に見て日本の子供は自己肯定感が低くなっている。
今の学校教育の在り方や親の考え方を見直していかないとメンタルの病気から自死につながってしまう子供が増えていくのではないかと危惧される。親に対

する心のケアや支援も大切であると感じた。

- 子ども夢パークを作るにあたり、子供たちの声を聴きながら、たくさんの不登校児童生徒や親の声を拾っていたこと。学校以外に子供の居場所を作るべきであるとする生涯学習推進課と、不登校の子供を学校に戻すべきであるとする学校教育部指導課、また、民間団体を含めた粘り強い協議の末に施設のオープンにこぎつけたことに大変感銘を受けた。

現在では学校に行かない選択は当たり前であるが、子ども夢パーク開設に向けて意見が対立していた際、学校教育に戻すという立場である学校教育部指導課長の「学校にいけなくて苦しんでいる子供を学校教育の縛りから解放し、いたるところが学びの場であり、それを川崎市として認める必要がある」といった子供のことを第一に考えた趣旨の発言が素晴らしかった。

- 千葉市はステップルーム、教育センター、ライトポートなど不登校対策に当たっているが、学校以外で子供が何をしても、または何もしなくてもいい居場所を公設で作る必要があるのではないかと感じた。

- 子ども夢パークは、子供の権利が当たり前を守られている場所であり、「作業中、手と口出さず見守ってね」と書かれた看板などあらゆるところにそのことが表されていた。

プレーパークではハザード(見えない危険)を取り除き、リスク(見える危険)についてはあえて取り除いておらず、危険なことも自己責任で遊ばせており、安心して失敗できる環境づくりをしているところが素晴らしい。

社会、家庭、学校で安心して失敗できる環境を作っていくことが大事であると感じた。

- フリースペースえんでは、不登校の子供たちがありのままの自分でいられる場所があり、強制や禁止されることがないため、時間はかかっても好きなことを見つけて社会的に自立していくことができるというモデルを示していると感じた。

- 不登校生徒にはいい施設であると思うが、一方、学校に行くことを試みた方がよいケースもあるかもしれない。まずは学校復帰を考え、それが難しいようであればこのような施設を利用されるのもいいと考える。

- 不登校児を減らすための学校改革について、各学校の教育方針に対する権限は学校長が持っており、学校長が教育改革に乗り出す決断をすれば速いスピ

ードで改革を進められるといった実例から、改革を進めたいと考えている学校長がいるのであれば、その校長になるべく不利益が及ばない形で改革を進められる仕組みづくりと、単独でやるのが立场上難しいなどあれば、数校がまとまった形で実施していける仕組み作りを進めていければいいのではないかと。

本日聞いた話は、校長会で聞いていただくのが良いのではないかと。

また、不登校児童の少ない学校があれば、その状況について校長先生同士で意見交換をしながら分析し、今後の学校の在り方について議論を活発に行っていくべきであるとする。

- 夢パーク構想の話が持ち上がった時に、川崎市にちょうど塩漬けになっていた用地があったため、広い土地に施設を建てることのできたことであった。

千葉市では、例えば県保有の土地に建てられた美浜区の公立小学校について、学校用地として使用することを条件に無償で借りているとのことだが、将来的に子供たちが減り閉校となった場合の跡地について、プレーパークのような不登校児の居場所としての利活用であれば教育施設としての利活用をスムーズに行うことができるのではないかと。

2 名古屋市 (1)名古屋市立山吹小学校

<p>調査目的</p>	<p>山吹小学校では、令和元年度から「イェナプラン教育」のコンセプトを取り入れた教育を実践している。民間事業者のもつノウハウを活用しながら、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現する公立学校の先進事例として調査し、本市取組の参考とする。</p>
<p>視察概要</p>	<p>1 調査項目 イェナプランを取り入れた教育について(現地調査)</p> <p>2 説明者 ・名古屋市立山吹小学校 校長</p> <p>3 主な質疑応答(□:質疑、■:答弁)</p> <p>□ 今、不登校の子が多いと思うが、こういった授業をすることによって不登校の子が減ったなどの事例はあるか。</p> <p>■ 文部科学省の定義としては30日以上欠席で不登校という扱いになるが、今年度半分以上が過ぎた段階で30日以上休んでいる子は何人かいる。 だが、不登校の子は確実に減っているし、その子たちが学校に全く足を運ばないのではなく、来られたり来られなかったりという中で30日を超える欠席である。不登校とカウントされる子は何人かいるが、学校へ全く来られないといった子は本校にはいない。</p> <p>それぞれのケースがあつて様々ではあるが、障害などにより教室でじっとして居られないという子がなくなっていることは、心的安全性が守られ、学級の居心地がいいのだと思う。発達障害などというと、同じことをみんなと同じペースでやるということがとても苦手であるが、これまでの学校の中でそのことを強いてきたところに無理があつたのかなと思う。そのような点について、本校の取組はいい方向に向かっているのではないかと思う。</p> <p>□ 名古屋市教育委員会から名古屋スクールイノベーション事業の後押しがあつたとのことであるが、小学校としてこの事業に手を挙げたきっかけ、予算やマッチングに関する費用について伺う。また、マッチングした相手先との意見交換というか、まさならなところからのイェナプラン導入であつたと思うが、どのようにされたのか併せて伺う。</p>



【視察の様子】

■ スクールイノベーション事業では、画一、一斉からの脱却というのがあった。その大元として、不登校やいじめなど学校での居心地が良くないといった問題があり、学校生活の中で一番多くの時間を占める授業を見直す必要があるのではないかと考えたことから、子供中心の授業に改善していこうというのがスタート。

令和2年度にマッチングプロジェクトを始めて、学校から課題とやりたいことのニーズを出してもらった。140校以上の応募の中から教育委員会が審査し、6プロジェクトを選び、学校のやりたい課題に協力していただける民間企業の方々を公募した。その公募を基に教育委員会がマッチングさせた。

学校側としては、授業改善を進めたいという教育委員会の流れの中で、イェナプラン教育について勉強するきっかけがあり、名古屋の他の学校で、イェナプランのブロックアワーを取り入れている先生がいるという情報を得たため見に行ったところ、本日皆さんに見ていただいたように、勉強をやらされているという雰囲気は一切なかった。

子供たちに話を聞くと、その日の自分で立てた計画を自分の口で話ができるという姿があり、授業は本来こうでなくてはと実感し、取り組む価値があると感じた。そのような中、スクールイノベーション事業が立ち上がったため、令和2年度のマッチングプロジェクトに応募した。

予算については、市長が力を入れていた事業であるため何千万円という単位で予算をつけていただき、今の日本イェナプラン教育協会の方に毎週来てもらって勉強会を行ったほか、施設面では子供たちが様々な形態で勉強できるように廊下にアクセスポイントのついているモニター、体育館には天井吊り下げ式のプロジェクターを設置したり、図書館を改造したりという事もやってもらった。教育委員会が現場と市長の間に入り、上手に現場に沿う形でやってくれた。

□ 授業への取組はとても素晴らしく、子供たちが学校・授業を楽しんでいるように見えたが、教員を増やさないと子供たちを見きれないのではないかと。また、各自学習の取組への自由度が高いが、評価についてはどのようにするのか教えていただきたい。

■ 今日授業を見ていただいたとおり、子供たち自身で学習を進めることから授業中に教員の手が空くため、これまで以上に子供たちを見るのが可能になっている。支援が必要な子に寄り添うことができるし、他の子は、自分の学びに向っている姿がある。もしここにもう1人先生が増えれば個別指導が充実するだろうし、探究的に進めていく子に対してもよりきめ細かなことができるので、そうなればありがたいと思う。

評価に関しては、文部科学省の学習指導要領に沿ってやっている。評価の迷いとしては、主体的に学習に取り組む態度というところ。よく手を挙げる子が意欲

的であるなど表面に見える部分で評価しがちであったが、一生懸命やるだけではだめだよということが言われていて、具体的には粘り強く学習に取り組むという側面と、学びを自ら調整するという2つの側面で評価するとなっている。

一斉指導では、先生がしゃべって子供たちが理解する・しない、という部分だけであると調整も何もなく、それに対し主体的に取り組むところを評価するところが難しかったが、そのような調整から取り組み方といった部分が今子供たちに委ねられていて、合わせて評価できる。

学力についてはどのような変化があるか。

■ 数値で出すのは難しいところがあるが、知識・技能の部分で下がっているということはなさそうである。本当は中学、高校、大学入試など、記憶力に頼る知識・技能に頼るテストではなく、思考力、判断力、表現力などを工夫してやってくると、私たちの学校でやっていることがもっと生きてくと思うが、どうしても親も、知識を問う入試に対してどうなるのかということを気にしてくるので、私たちのような授業に対して学力を心配する声はあるが、自信を持って取り組んでいるし、本日視察していただいて感じていると思うが、やらされている勉強と自分から進んでやる勉強とは同じことをやっても身につくことが違うので、これでよいと思っている。

教育上のデメリットはあるか

■ どの学校でも取り入れて欲しいと思っているが、先生たちの中でも、これまでの様々な経験で指導をして、びしっとさせるということをしてきている。また、きちんと指導をした方が先生や親、周りから見た時に学校らしく見える、いい姿に見えるということにとらわれている。

過去には学級崩壊の際に上から抑えようとしてはじめてしまったというようなこともあったと思うが、そのようにしてうまくいった成功体験もあるでだろうし、力で抑えているだけではどこかではじけることも出てくるという経験もしている。その部分での意識改革が本当に進まない、真には浸透しないと思っており、いろいろな学校が進めていく上での課題だろうと思っている。

課題として保護者の理解があったと思うが、今、山吹小学校のような教育が取り上げられるようになってきた中で、はじめの頃はしっかりやっているのかと心配する声があったとのことだが、保護者の理解を得ることができた経緯について、もう少し詳しく伺いたい。

■ 今日皆さんが視察をして感じてくださっているように、授業参観など見ていただく事ができれば、もう少し早く浸透できたかなと思っているが、コロナ禍で子供の

姿を見ていただく事ができず、ずいぶん時間がかかったのは事実だが、名古屋市のお墨付きをもらって進めていけたことが大きかった。

学校便りなどの他に、このためだけの通信を作り、名古屋市のプロジェクトによりこのような学校づくりに取り組んでいるということを周知したり、PTAの家庭教育セミナーに講師として招いてもらって話をするなど積み重ねの中で、新聞やテレビにも貢献してもらった。

最後はやはり、子供たちの姿が変わるというのが大きかった。中学校へ行って普通の授業になってしまうケースも多くあるが、中学校の先生から、山吹小の子供たちはテスト勉強などの際、自分たちで計画を立てて勉強することが得意であると聞くこともある。

□ 中学校でも同じようなスタイルで続けられるとよいと思うが、近隣中学校との連携や今後、教育委員会としてもモデル的に取り組んでいく地区があるとか、何かあれば教えていただきたい。

■ 教育委員会で考えており、私たちのような取組を大がかりな予算で行うのではなく、授業改善に積極的に取り組みたいというスクールクリエイターを募集し、その人たちをオランダへ連れて行くなどしており、オランダの学校教育を生で見に行っている。昨年は近隣中学校の方がその役割を担い、いわゆる自由進度学習、例えば特定の授業の中だけで今までのような一斉授業ではなく、子供たちが自分のペースで、自分で課題を見つけてなど実践している。

教育委員会主導の上、個人で勉強できる機会を作ってくれているし、様々なプロジェクトをやっている。方法が大事ではなく、こういう考え方で授業を進めることが重要であり、ただ形だけ真似をすると失敗するので、考えを浸透させることが大事である。

4 現地調査の様子



【生徒自ら立てた学習計画に沿って自分に合ったペースで学習を進める
YST(山吹セレクトタイム)について説明を聴取】

3年4組時間わり (10/23~10/27)

	月(23)	火(24)	水(25)	木(26)	金(27)
	認証式	サークル対話	★	★	力だめし⑥
1	理科 ★ インストラクション	消防署見学 9:10 発 10:45 着	★	国語 ★ インストラクション	★ 体育運
2	算数 ★ インストラクション	1組と一緒に 行きます。	★	★	★
3	★	★	★	★	1週間のふり返りと 会社活動
4	音楽室 永田先生	★ 体育館	★ 音楽 永田先生	★ 音楽 永田先生	★ 新しい1年生が 健康診断にくるので 12:30 下校
5	★ 道徳 社会	★	★ 体育運	★ 国語 ★ 函工インストラ クション	
6	★	★	★ 国語 ★ 絵文字のしようか い文の共有	★ びん(まだ持って来 ていない人)	★ 家庭教育セミナー 申し込みめきり
	★ 冬の読みものしめき り				

★YST(やまぶきセレクトタイム) 自分で計画をたてよう。
【今週の課題】 自分で作るオリジナル時刻表にチャレンジ。

夫しよう。

【時間割例(★印はYSTの時間)】

<p>主な 委員所感</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業中につまらなそうにしている子が少なく、それぞれが集中して学んでいたことが印象的であった。子供たちが自分の計画に基づいた様々な学習を、同じ時間に1つの教室で行っているほか、教室のレイアウトも自分たちで考えて配置し、各自が自分に合ったペースで、廊下であったり寝っ転がりながら勉強してもよいなど選択できる自由度が高いことから、子供たちのモチベーションが確保されているように感じられた。 ○ 不登校の子供たちが問題となっている今、取り組むべき一番の課題は、学校を安心して通える場所にあること。これに真正面から取り組むことが新しい学校づくりだと考える。「学校改革」を外さずに取り組んでいる教育委員会の姿勢を尊敬する。 ○ イエナプラン方式に対するデメリットはないと言い切る校長先生の姿に、覚悟があると感じた。 ○ 自立した学びを身に着けるためのYST(山吹セレクトタイム)を視察し、いつ、何をどのように学ぶかを子供たちが学び方を組み立て、週計画に沿って自主的に学習を進めていることを確認した。 自分で決めた科目で学習内容を決めているので、子供たちは大変興味を持って周りの子供たちと話し合いながら進めていることが見られた。このYSTを取り入れることで子供たちが自主的に学習していることから、教員が個別に指導できる時間は確保されているように思う。先生方も勉強を教えるという視点ではなく、子供に寄り添って支援をしているという姿勢が感じられた。 一斉授業を脱却し、工夫された子供中心の授業を拝見することができ、千葉市の参考にしたいと感じた。 ○ クラスによって雰囲気は違っており、先生方の工夫している授業を見ることができた。担任の先生の持ち味を生かしつつ、子供との人間関係を作っていくことが大切だと強く感じた。 ○ 全ての授業を子供たちが自ら選択しなければならないのかと思っていたが、週の10コマ程度であった。その10コマを子供たちが自分で考えて選択していくという作業を行える環境はとてもよいと感じた。自分で立てた計画なので、うまくいかなかった場合には危機感を感じることもできる。また、計画に対する達成度の評価も行いやすく工夫されていた。
--------------------	---

- これまで150年続いてきた一斉授業は、習熟度の違い、いじめや不登校の増加、発達障害などのある子供への対応等について難しい状況にある。研究主題を設定し自立や共生社会に向けた教育は、一人一人を取り残さない教育につながると思った。山吹小学校では、イエナプラン校を目指すのではなく、考え方を参考にしているとのことで、実践しやすいと感じた。
- 椅子に座って先生の話をもみんなで同じように聞き、それをノートに書くといったことが難しい子もいる。一斉授業の中で歩いてしまう子や、授業で答えられずに嫌な思いをしたりみんなの前で先生に怒られるなどを経験し、学校に来られなくなる子供もいるが、自由度の高いこの授業では、それぞれの良さが活かされ、輝ける機会が増えるのではないかと。
- 現状の一斉授業では単元についていけない子や理解度が高くてつまらなく感じてしまう子供への対応は難しいが、個別最適な学びと協働的な学びを実現するための手法として「自由進度学習」は効果的である。
自由進度学習についてはデメリットを感じないことから、千葉市でもどのように取り入れるかを考えたい。多くの委員がモデル校としてでも取り入れてみたいという思いを持ったことを形にしたいと考えることから、教育委員会への何かしらの提案という形とするため、次の振り返りを大切にしたい。
- 自由度が高く、子供たちの習熟度を把握していくことは難しいのではないかと。
- 千葉市で取り入れるためには、先生方の意識改革が必要だと思うので、まずはイエナプラン教育についての研修を行い、やってみたいと思える先生方を増やしていくことから始めてはどうか。
千葉市に導入する際の課題として、教育委員会がこの教育方針を後押し、支援していく姿勢を持つこと、予算の確保、保護者への理解を得ること、校長、教職員の意識改革、強い旗振り役と広く同意を得るような広報手段、イエナプラン教育をはじめ、子の教育方法を学ぶ研修が必要ではないかと。
- 不登校問題に関していえば、650人ほどの大規模校でありながら、年間30日程度休む子はいるが、全く学校に行けていない子が一人もいないというのは、このシステムが不登校の解決に効果があることを表しているのではないかと考える。

2 名古屋市 (2)名古屋市科学館

調査目的	<p>名古屋市科学館は、「みて・ふれて・たしかめて」をコンセプトに、様々な展示や体験を通じて、子供から大人まで楽しみながら科学に触れることができる総合科学館で、ギネス認定された世界最大級のプラネタリウムを有する。これまでの取組や運営等について調査し、本市取組の参考とする。</p>
視察概要	<p>1 調査項目 名古屋市科学館の取組等について(現地調査)</p> <p>2 説明者 ・名古屋市科学館 総務課長 ・名古屋市科学館 学芸課長</p> <p>3 主な質疑応答(□:質疑、■:答弁)</p> <p>□ プラネタリウムのプログラムは何種類かあるのか。</p> <p>■ 年間約10本のプログラムを一般投影として行っているほか、学校向けの学習投影や、七夕の時期と幼稚園生の卒園時期、夜間の投影など、様々なテーマで提供している。それらのプログラム自体を当館の7名いる学芸員が中心となって全て作っており、プログラミングや映像を作るのも内部で行っている。</p> <p>□ 「みて・ふれて・たしかめて」をテーマとしている館だと伺ったが、触れてというのは具体的にどのようなものに触れることができるのか。</p> <p>■ 解説パネルを読むだけではなく、ボールを動かしたり、磁石につくものを自分の手で付けたりなど実際に操作をするものが多い。展示物は260点ほどあるが、半分近くが体験型の展示となっている。</p> <p>□ 名古屋大学は工学部など有名かと思うが、大学との関係について伺う。</p> <p>■ 当館と一緒にやりたいという声を多くいただっており、名古屋大学、名古屋市立大学ほか、いろいろなところと連携を結び、公開セミナーなど授業を行ったり高校生、一般向けの実験教室を開催したりということを行っている。</p> <p>□ 来場者の市内、市外などの内訳についてはどうか。</p>



【視察の様子】

- そのような集計はしていないが、アンケート結果で見るとおおよそ市内3割、県内が2割、県外でも近隣が1割、その他県外が4割となっている。
- 予算について伺う。
- 年間で約10億円ほど。うちプラネタリウムが年間約4億円、プラネタリウム工事費は約25億円である。
- 一般と高校生・大学生の方について、年間パスポート利用者は多くいるのか。
- 年間パスポートの利用者は、大人の方でピーターとして毎月のようにいらっしゃる方が多い。高校生、大学生ではあまり持っている方は少ない。

4 現地調査の様子



【世界最大級のプラネタリウム】



【名古屋市科学館前にて】

<p>主な 委員所感</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 観覧料が中学生以下は無料となっており、テーマ通りの体験型施設であるため言葉が分からない小さな子供たちにも科学に興味を持ってもらえているのではないかと考える。 ○ 平日にもかかわらず来館者も多くおり、規模、入館者数共に大変注目され、悠久の歴史を感じることができる良い施設である。科学館だけではなく美術館や公園など、周辺的环境も整っており、市民の憩いの場として、名古屋観光地の一つとしても機能しているように感じた。 ○ 年間約10億円との予算の大きさに、科学教育振興に重きを置いていることがよく分かった。また、市の誇りであろうことが職員の態度・言動に表れていた。 ○ 世界最大級のプラネタリウムでは、360度見渡すことができるように動く椅子があり、専門学芸員によるライブ開設は大変分かりやすく星を見ながらリフレッシュできた。投影の内容が月替わりという部分は、毎月足を運ぶ人を増やすことにつながるので本市科学館でも取り入れていけるとよいと思う。また、年間プログラムも参考になった。 ○ プラネタリウムのプログラムを制作からアナウンスまですべて学芸員が自分たちで取り組むことで科学館に対する愛着が生まれていると感じた。
--------------------	---

3 岐阜県

調査目的	<p>令和3年6月に策定された岐阜県学校・フリースクール等連携ガイドラインでは、学校とフリースクール等民間施設・団体との連携の必要性や民間施設・団体における望ましい運営、相談・指導等の在り方についてなど示しており、ガイドライン策定の経緯、背景や現状の課題、今後の取組等について調査し、本市取組の参考とする。</p>
視察概要	<p>1 調査項目</p> <p>岐阜県学校・フリースクール等連携ガイドラインについて(現地調査)</p> <p>2 説明者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・岐阜県教育委員会事務局 義務教育課 教育主幹 ・岐阜県教育委員会事務局 学校安全課 生徒指導企画監 <p>3 主な質疑応答(□:質疑、■:答弁)</p> <p>□ 今後のガイドラインの改定はどのような部分を変えるのか。また、サポートセミナーについて保護者向けのものがあるとのことだが、どれぐらいの参加者がいて、反応はどのようなものか。</p> <p>また、支援センター、不登校の子について、情緒障害や境界知能とされるIQが70から85ぐらいの子たちが不登校になるという状況を聞いたことがあるが、そういったデータがあればお教えいただきたい。</p> <p>■ ガイドラインの改定については、例えばデータの部分で、不登校の子が増えているので数字を更新していくほか、学校の現場はどのような状況なのかというところを盛り込んだり、コロナ禍に端末を使った学習支援なども増えており、事例紹介等を中心に載せたい。また、学校、保護者、児童、施設がうまくつながれるように地区別情報交換会から寄せられた連携の好事例も載せたい。</p> <p>サポートセミナーの参加者については、昨年が250人近くいて、今年は今現在で150人を超えており、今後も参加者は伸びると思う。ニーズがどんどん高まっていると感じる。保護者の反応としては、不登校の原因が自分たちのせいではないかと思っている方などいるが、そうではないということを理解し考え方をいろいろ聞くことで、安心したといった反応が多かったと思う。進学情報についても聞くことができありがたいとの声が届いている。</p> <p>不登校となる子の状況については、様々な要因が複雑に絡み合っており、原因を断定することは難しいが、子供の持っている特性からどういった場所で学ぶことがいいのかといったことをきちんと対応していきたい。</p> <div data-bbox="895 891 1331 1218" style="text-align: right;">  </div> <p style="text-align: right;">【視察の様子】</p>

□ 昨今、フリースクールへの期待が高まってきているので、親が自分で情報を集めたいというときに【「学校・フリースクール等連携ガイドライン」等、不登校児童生徒の支援に係る Q & A】という資料の中で、「県内のフリースクール等を一覧にまとめる予定はあるか」という項目や、「フリースクールは認可されるのか。良い施設かどうかの判断が難しい」という問いかけが出てくる。どのように整理されているのか。

また、経済的な支援についてはどのような考えか伺う。

■ フリースクールは様々あり、紹介されてもかえって困ってしまうといった事がないよう、日中、学習活動をしているものに限定し、加えて利用料を調査するなどして、最低限ではあるが昨年8月に一覧を作成した。

経済的な支援について、県の教育委員会としては、他にお金をかけないといけなところが多くあり、民間施設等には公費を投入しないというスタンスでやっている。関係部局と連携をし、貧困家庭への支援制度を積極的に活用してもらいたい。

□ フリースクールで出席扱いとなる基準など作っていると思うが、例えば地区によって生活環境や条件が違ってくると思う。都市部と農村部、山間部など場所によって条件が違ってくる。出欠席について、最終的には学校長が判断をすると聞いたが、校長の裁量はどれくらいの権限があるのか。

■ 出欠席の判断については、第一義的には校長の権限のみであるが、当然独断で決めるわけではなく、市町村の教育委員会に相談をしながら決めていくものである。

地理的条件でいうと、学習活動が学校教育課程に即しているものかどうかによるため、地域差はあまり関係ないと考える。施設等で実際に何が行われているかという中身で判断する。

□ 小・中学生のそれぞれの学年が不登校になりやすいのか。また、不登校となった時期や環境などの要因について、わかる範囲で伺う。

■ 具体的な数字は申し上げられないが、不登校は中学生になった段階などで急に増える傾向が多い。昨年度の文部科学省の調査によると一番大きな要因は学習であるとなっていたが、一つのきっかけであり、いろいろなことが複雑に絡みあって要因となっている。

□ ICT活用が進んでいると感じるものの、都市部から農村地の先生までがそういった支援を行えているのか疑問を持つが、このあたりの取組状況はどのようになっているか伺う。

	<p>■ 今年度、学校内教育支援センターを設置し、補助金を出しているところを中心に見に行ったが、そのほとんどがどこも同じように教室の授業をつないでやっていた。</p>
<p>主な 委員所感</p>	<p>○ 学校以外の居場所の提供先として、フリースクールに頼らざるを得ない状況があるが、子供たちに合った居場所を見つけるためには、様々な情報や子供への丁寧な聞き取りとマッチング、学校とフリースクールの連携など必要である。</p> <p>フリースクールの実情が好ましくない場合に、県や市としてはどのように介入ができるのか。また、介入してしまうとフリースクールとしての自由度が失われてしまうのではないかという危惧もある。</p> <p>しかし、多くの選択肢があり、それを自由に選択できる状況があれば問題とならないのかもしれないが、そのためには、授業料の補助や学校同士の連携を強化していき、多様な学校間等の行き来がよりしやすくなるような仕組みづくりをすることで、多様な学校に通学する際の障壁を減らす必要があるのではないかと考える。</p> <p>○ ガイドラインを策定することによって学校とフリースクールとの連携がしやすくなり、不登校への対応について、より意識的に取り組みやすくなったのではないかと感じる。</p> <p>○ ガイドライン策定の経緯について、参考となった。また、不登校の小・中学生を支援する機関の周知をしっかりとされていると感じた。</p> <p>○ 個々の対応についてよく取り組んでおり、県教育委員会としては学校への判断、親の苦勞への配慮などしている様子を感じた。</p> <p>○ フリースクールの状況をしっかりとつかむことが重要で、適切なフリースクールを選択できるようにすることも教育委員会の役割と考える。今後、フリースクールの定義を国が定めることが求められる。</p> <p>○ フリースクールへの公費投入は行わないとのことであったが、今後ますます増えていくであろう不登校対策の受皿として、フリースクールへの補助は必要になってくると考える。</p> <p>また、不登校対策には専門家の支援が欠かせないため、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーの配置をするための予算措置など拡大していくことが大事ではないか。</p> <p>○ 岐阜県学校・フリースクール等連携ガイドラインの中で、フリースクール等の実施主体がどのような団体であるかといった、保護者等が安心して利用できるようにす</p>

	<p>るための視点がまとめられていることを認識した。千葉市においての多種多様なフリースクールのカテゴライズや保護者等への情報提供につながるようにしたい。</p> <p>○ 学校・民間施設、団体と連携した不登校支援のICT化が進んでおり、三次的支援においてもICTが有効活用されていると認識するとともに、千葉県、千葉市においても参考とし、ICT化と三次的支援に役立てていく必要があると感じた。</p> <p>○ 県内の各自治体教育委員会へ届けたという資料【「学校・フリースクール等連携ガイドライン」等、不登校児童生徒の支援に関わるQ&A】は各自治体間で意識の差を生まないためにもとても有効だと考える。ガイドラインの内容を適切に共有していく意識を感じた。</p> <p>○ フリースクールとの連携について、学校間で差が生じることが問題であるのは岐阜県でも同様にあったが、教育委員会で実際にフリースクール等に足を運んで丁寧に見ていることから「岐阜県学校・フリースクール等連携ガイドライン」での適切な活動事例の共有につながっているのではないかと感じた。</p> <p>○ 学校内教育支援センターでの心理面での居場所づくりについて、よい考えである。環境面と同時に整えることで、相乗効果が期待できると思う。また、オンラインで開催するなど幅広い方たちを対象にしているところは学ぶべきであると感じた。</p> <p>○ 学校内教育支援センターの活用についても県内自治体全体で進めており、ICTの活用や学校内教育支援センターの運営手順を作るときに草潤中学校(学びの多様化学校)の基準を参考にしているとのこと。先例を活かして全体へ広げようとする好事例だと思う。</p>
--	--